

「そのぼり」の仲間より : 特集(2)

雑誌名	日本文学誌要
巻	63
ページ	106-111
発行年	2001-03-24
URL	http://hdl.handle.net/10114/00020155

「そとぼり」の仲間より

特集 追想小田切秀雄先生②

日本文学史にその御名が銘記されるにとどまらず、韓国、中国、その他の海外の国々にまでその御名が広く届き渡り、この世にことばがある限り永遠にその御名は残ると信じて居ります。

その御名とは小田切秀雄先生です。

遺骨が小田原の北村透谷さんのお隣に安置されていることに奇しいものを感じて居ります。

〈鶴沼洋一・一九九二年卒〉

小田切先生へ

昨年末に、注文していた『小田切秀雄全集』が届いたとき、ああ、先生が訪ねてきたと思いました。しかし同時に、もう先生の肉声を聞くことはないのだな、とひどく淋しい気分にもなったことでした。ここしばらく、年の始めには何人かの先輩たちと先生のお宅を訪ねておしゃべりする一時を持っていました。もうそれは永遠にかなわなくなったからです。今年の正月はそのかわりに、折をみては『全集』を拾い読みして、淋しさをまぎらわしていました。幸いなことと言いましょいか、話す

ように書いた先生の文章からは自然、あの口角泡を飛ばすような熱っぽい話しぶりが生々と立ちのぼって来るようでした。今後は『全集』をかけがえのないよすがとして先生を偲び、また講義を聞くようにして、もっともっと多くの示唆を受け続けたいと思います。

〈小笠原賢二・文学部講師〉

「小田切先生 追想」

立ったまゝ死んでしまわれた。

先生を思うとき、なぜかそう思ってしまう。

生涯現役ということもあるが、

先生の全生涯は立ち上がったまゝ、歩きづめの人生であったからであろう。

これはスゴイことだ。

今も先生を思うとき、

どんどんと先の方を歩いて行かれる、

先生の後ろ姿ばかりが浮かんできてくる。

片方の肩を下げ、どんどんと小さくなってしまわれる

先生の後ろ姿ばかりだ。

〈下澤勝井・一九五八年修士修了〉

ここからは無明長夜に身を処して

化石の句を模しての感懐。常に励ましをくださり、指針を示してこられた先生に逝かれては、弟子は何をする気にもならぬ

のが当然。とくに近年、友を失い、先達を失い、母を失った身には、ここに師に逝かれたことは暗き夜を旅するみなし子に等しい。

僻遠の教え子の願いをいれて、この地を訪れ、講演くださったこと三度。その師のありがたさをしみじみと思う。

〈今谷 弘・一九七一年卒〉

小田切先生を思い出す。

㊤

大階段教室で私はいつも同じ席に座り先生を見つめた。時々、先生と視線が合う。それが嬉しくて、待ち遠しくて、いつも同じ席に座った。ただそれだけのことだったけれど、私は教え子であることが誇らしい。小田切先生ありがとうございました。

〈中野きよ恵・一九九〇年卒〉

㊤

先生は我が校で教鞭を取られる一方で、戦前から評論家として活躍しておられました。古典から現代文学に至るまで幅広く研究され、文学界においても重要な地位を占めておられました。残念ながらお会いする機会はありませんでしたが、先生の作品からは実直でやさしいお人柄が伝わってきます。そしてこれらの作品は、これからも私達に知的影響を与え続けることでしょう。

心からご冥福をお祈り致します。

〈入野弘子・通教部四年生〉

Ⅱ 小田切先生との思い出Ⅱ

一九八四年二月四日(土)、小田切先生が水上勉氏、立松和平氏らとともに講演されたときの出会いが、私にとってたった一度の出会いであった。闘病生活後初の講演で、病身ではあるが、意志の強さと文学に対する情熱が実感できるものであった(具体的内容は思い出せず、立松和平氏の「現代文学に労働という考えが欠落している」という指摘しか思い出せない)。二十世紀とともに去られたのは象徴的なことのようにも思える。

〈長谷坂守彦・二〇〇〇年卒〉

㊤

「多くの思い出から一つ」

小田切先生には川崎の教養から市ヶ谷の文学部に移った五三年に直接お教えを受けることになった。当時、先生の評論家としての人気は絶大で、他大学生の盗聴も多かった。私が宮本百合子の研究をする事になったのも、先生の影響が大きい。八一年に拙著『福島と近代文学』(櫻楓社)の帯に先生は推薦文を書いて下さった。その感謝を会津桐花器に託した。先生ご夫妻にお喜びいただいた思い出は忘れられない。

〈塩谷郁夫・一九五六年卒〉

㊤

一九六〇年代は法大で不祥事が続き、総長は何度も変わった。その挙げ句、小田切先生がとりあえず総長代行になられた。ところが日文科の現役教授のままであり、折しも私たちの卒論面接のとき、担当講師の正木信一先生の脇に列席される、という。

「総長代行が」と皆あわてたが、結局それはなかった。拍子抜けとホッとしたのと入り混じった気持ちだった。『平家物語』で書いたのだが、あのとき列席されていたら、随分絞られたはずである。しかしサシで向き合う唯一の機会だったのに、と、いまは残念である。

〔川田正美・一九六六年卒〕

㊦

直接先生と対でお話し出来したのは卒業論文提出の時と面接の時でした。私の卒業論文の論題は「与謝野晶子の短歌にみられる文学的影響の享受及び根本精神」でした。

与謝野晶子さんの長男光氏が以前、私共の近隣の保健所長をしていた関係で、その筋の人に紹介していただき、西武新宿線の中井駅近くにお住まいになっている光氏を訪ね、種々ご教導を受けました。

そのような経過があり、下書きを先生に見ていただきました。先生のアドバイスは、段落と句と点をしつかり記して下さい、結論は自分の考えを記して下さい、とのことでした。数年経って国文学会の懇親会でお目にかかった際、君には良い点をつけたと思うと云ってくださいました。夢にも考えてなかったお言葉に、ただただ感激するだけでした。

〔水越昭久・一九五七年卒〕

㊦

拙著『文学の中の他者』（青柿堂）をもって入院されている病院にうかがった時、先生は、ドストエフスキの『罪と罰』をお読みになっておられた。本をバラバラにし、数ページを手にして読むというやり方であるが、そういう形でベッドで小説を

読むお姿——そのすごさが、今も忘れることができない。

〔前田角蔵・一九七三年修士修了〕

㊦

「叱責（思い出として）」

「君らは高橋和己も読んだことがないのか。」最初の授業で唐突に言われ、以降、小田切先生の口から出る作家の名前をノートしながら、自分の不勉強さを嘆いた。「私の言うことに頷いているようじゃ駄目だ。私を論理的に越えて批判しなさい。」……論理的につて……そりやあんまりだ。」当時十代後半の私には荷が重すぎた。時は流れた。「君等は僕より国語が出来るようにならないと、大学なんか無理だぞ。」教壇でそう言いながら思わず苦笑。少しでも小田切先生に近づきたい。大学生だった私を初めて叱ってくれた先生なのだから。

〔鮎沢浩二・一九八五年卒〕

㊦

「忘れられぬことも」

一九五二年「血のメーデー」で哲学科の近藤君が警棒で殴られ亡くなった。当時参加者の検挙が喧伝され、学内追悼抗議集会も禁止された。当然のことながら自治会は強行実施し、友人代表として私も追悼文を朗読した。その三日後、近藤忠義先生に呼ばれ、「文学部教授会で問題になっている。刺激を避けるため、しばらく登校を見合わせた方がよい。」と忠告された。一週間ほど経って登校し、大学新聞に頼まれて「連帯は友情の絆で」という追悼文を掲載したが、その後、何の咎めもなく終わった。後日、近藤先生から「小田切先生などの強力な発言で、教授会

では特に問題にしないことになった。」と聞かされた。

小田切「源氏ゼミ」で二年間お世話になり、お宅にも時に伺って、卒論への指導助言や大学院への推薦などもしていただいたが、このことに先生は一言も触れることなく、いつもいわゆる小田切スマイルで励まし接して下さった。

卒業後、十年ほどはお宅を訪ねもしたが、その後は心に掛けながら、不義理をしてしまった。ご冥福をお祈り致します。

㊦

〈矢島浩三郎・一九五四年卒〉

「小田切先生の最後の葉書」

小田切秀雄先生が、次男の統二氏が院長をしている鶴川サナトリウム病院に入院されたのは二〇〇〇年一月六日のことであった。私は同病院にかけつけたが統二院長から病状を説明され、面会謝絶の状態と告げられた。間もなく昭和医大病院に転院され、そこで五月二十四日に永眠された。

私の手元に年賀状に混じって先生の葉書があった。恐らく生前の先生の最後の葉書ではないかと思う。消印は「二〇〇〇・一・一 OMORI」とあった。

拝復 御本項きながら御礼が遅れました。ここのところ体調わるく半ば寝たきりでこのハガキを書くのも精一杯というところですよ。

—新装版よく出来ていると思いました。(写真もなつかしい。)新しく加えられたものとあわせて病床でゆっくり再読します。とりあえず御礼まで。

この葉書は私が三十年目に新装版で復刻した小説集『黒い川

の流れ』を送ったことへの返信であったため「拝復」となっていた。先生が私の小説集を再読されたかどうかは永遠に謎となっていました。すくなくとも三十年前の少年のような私の肖像写真を見て頂いたことは葉書の文面から察せられる。

㊦

〈堀江泰紹・一九六二年卒〉

「忘れがたい先生のひと言」

一九五五年、文芸学概論の講義を受けた。グロッセの芸術の起源論から説きおこされ、現代文学の論評に至ったが、口角に泡をなしながら当時の文学状況と鋭く切りむすぶ講義は、いつも私たちを鼓舞した。そんな先生が講義中「官憲の、目に見えぬ追跡の恐怖を完全に払拭できたのは最近のことだ」と語られたことがある。先生のこの率直な告白に私は頭が下がる。三年前、未だ鹿地亘のゆくえも不明の頃、九州の果てで米軍の監視と日本の官憲の干渉にあいながら沖縄奄美の返還運動等に奔走していた「留学生」の私には、先生のお気持ちに痛い程わかるからだ。当時先生は民主勢力の台頭に強い確信を持っていたように思う。

九五年四月十二日、通院途中の先生に目蒲線の車中で偶然お会いすることができた。先生とお話したのはそれが最後であった。心よりご冥福をお祈りしたい。(合掌)

㊦

〈東 喜望・一九六五年修士修了〉

「小田切先生の雅の世界」

小田切先生は御入院の直前まで、私の俳句についての感想を

下さっていた。先生は一流の評論家として厳しく鋭い面が強く印象されているが、本質には雅の世界を深く蔵しておられたのではないだろうか。ささやかな俳誌「響」の創刊や記念号への御寄稿はもう頂けなくなったのだ。私は学生時代から先生の門下としては異端の存在であったが、後悔はない。これからも見守っていただきたいと念じている。先生のお別れ会の日、日暮里で30分も電車が停車して、到着した時は御令息の経過報告の途中で、十分聞きとれないのが残念であった。その後、綜合誌から依頼があり、お別れ会の会場で詠んだ作品を発表した。思ひ出を綴るのはこれからである。今は、大きな精神的支柱を失った悲しさと淋しきで頭の中が一杯である。先生長い間ありがとうございました。これからも御指示をよろしく願います。それではひとまずさようなら。追悼の句を左にかかげます。

五月二十四日

師は逝けり胸に大きな五月闇

六月五日

手には薔薇ヴィオロンびくお別れ会

白き家に白きともしび五月闇

小田切秀雄先生へ

「ありがとう」と薔薇の香りの遺族達

万緑に染まらぬ紙と万年筆

(作品は「俳句研究」8月、「響」10月号より)

〈中嶋秀子・一九六三年卒〉

※ 編集部注…

本コーナーは本来、巻末に掲載を予定していた「そとぼり通信No.39」の原稿として皆様からお寄せ頂いたものをまとめたものです。今回の編集方針により、連動する本誌の特集と合併する形で、こちらのページまで移動することとなりました。ご了承下さい。





二〇〇〇年十一月刊
勉強出版
一五二、〇〇〇円

戦後文学をリードした評論誌『近代文学』、その同人七人を俗に七人の侍と呼んだ。本多秋五、埴谷雄高、平野謙、荒正人、山室静、佐々木基一、そして、わが小田切秀雄である。小田切秀雄とはいかなる人物か。法政大学日本文学科の土台を築いた先生、とまず覚えておいていただこう。今、先生の84年間の仕事、この『全集』全19巻に収められた。編集委員長は本多秋五氏であったのだが、1月14日、この『全集』の完成を見て後逝された。編集本多氏を最後に、七人の侍すべて、激しくたたかい文学の野に果てた。だが、「たたかい」と言った場合、最もその名にふさわしい侍は、わが小田切秀雄であった。

まず、33年17歳、旧制高校一年生時に思想犯として逮捕される。75日間の拷問に耐える。釈放後も『保護観察』がつきまとう。44年玉川署に、45年憲兵隊に拘引される。この間論文114篇、単行本一冊、巧みに正体をかくしつつ、みごとに抵抗の姿勢を買った。第一巻「戦時下の仕事」に収められたこれら諸論文の多くは、活字つぶれ紙面すり切れた戦時下の新聞雑誌を底本にしている。編集者はよく判読した。

さて次のたたかいは戦後である。左翼陣営の旧態依然たる政治主義的文学観と厳しく対立した。「ナツプの眼鏡をはずせ」という著者のせりふは有名である。『政治と文学』の季節、著者のたたかいは両面作戦と呼ばれた。だがそれは、文学に深く根を下ろしてのものだった。党との対立はやはり深まって行った。

64年、党を除名される。当然の成り行きで著者は何の痛痒も感じなかったであろう。だが、この頃からようやく顕著になりはじめて来たソ連邦のよろしくない諸現象、鋭敏な著者において、それに気づかぬはずはなく、後に著者自らが口にするおのれ内部の「二ヒリズム」と、このことは無関係とは思われない。

やがて日本文学は、著者の命名による「内向の世代」ついで「空虚の世代」に入る。これも、著者の理想とする文学と一致するものではなかった。

こうして、「文学・近見と遠見と」を頂点とする最晩年の仕事に入る。夫人への三年間に亘る献身的介護、老齢に達しての、度重なる大けがと大病、その中で、これらの仕事なされた。

まさに「たたかい」としか言いようのない生涯だった。どの論文はどの巻にある、と一々示さなかった。全巻を通読してほしい。

さて、ジャーナリズムは、この『全集』の刊行、特に『別巻』の充実を賞賛した。それは教え子たちの回想記から見て取れる小田切秀雄の教師姿勢に驚嘆したのである。「この一巻は教員のバイブルである」と言っている。（『東京新聞』01・1・26夕刊）。この『全集』は、教師たる者、特に法政大学の教師たる者、必ず購入すべきである。

（田中単之）